慰霊碑に向かって手を合わせる男性＝17日午前

各地で追悼

「命守る」建築士志す

武庫女大・鎌田彩那さん

小4で描いた絵が契機

小学4年の時に描いた「震災の絵」を

「忘れてはいけない25年前のこと、亡くなった方々のこと、私たちが伝えていきます」。西宮市の武庫川女子大2年の鎌田彩那さん(20)＝神戸市東灘区＝は、阪神・淡路大震災の発生から25年となった17日早朝、神戸市中央区の東遊園地で竹灯籠(どうろう)に手を合わせ、犠牲者に語りかけた。

幼いころから絵を描くのが好きだった。日本建築に引かれ、姫路城や首里城を描いては親に見せていた。

小学1年の時、近所の絵画教室に通い始めた。「見たものだけを描くんじゃない。写真には写らない、物事の『中身』を描くのが絵なの」。教室を開く画家の中嶋洋子さん(67)が、世界を広げてくれた。

翌年の1月、教室の壁一面に震災当時の新聞紙面が張られた。煙が幾筋も立ち上る神戸の街の写真が目を引いた。生まれる前に故郷の街を襲った地震と、初めて向き合った。

中嶋さんは毎年1月、教え子2人を亡くしたことを涙ながらに語ってくれた。小学4年の時、その姿を残そうと、地震直後の2人とその家族の様子を水彩絵の具で描いた。

イスが倒れ食器が割れた部屋で、涙を流す子どもたちを抱く父の体を大きく、表情を力強く表現した。自分のような女の子の日常が突然断ち切られたこと、そして親の愛を描きたかった。

次第に、ある思いが固まっていった。「人の命を守れる建物をつくりたい」。一昨年春に武庫川女子大の建築学科に進み、1級建築士を目指す。「大好きな木造建築で地震や火事にも強い家をつくりたい。すごく難しいけれど、方法はあるはずだから」

約10年前に描いた「震災の絵」はこの日、東遊園地の一角に設けられた絵画教室のブースの中に張られた。その絵を見つめ、「あの日を経験していない世代こそ、頑張りたい」と決意を口にした。

(後藤遼太)